

【編集後記】

洞天の多くは江南にある。ところが、第一洞天の王屋山は洛陽より北にある。これは、河南や山東など黄河近辺の人々の信仰の痕跡なのではなかろうか。王屋山はなぜ「王」なのか？ 魏華存に伝授した神仙が王褒という王姓だったことと関わりがあると考えてよいのだろうか？ 魏華存は永嘉の乱で南に移った。琅耶の王氏も同じく南に移った。魏華存が神仙となって降りた許家と王羲之らの王氏は関係が深い。王氏は代々、神仙や道教を信奉しており、唐末の杜光庭は『王氏神仙伝』を編集しているほどである。

洛陽を挟んで、第一大洞天の王屋山は西北に座し、中岳嵩山は東南にほぼ対照的に座している。王屋山の洞窟から嵩山が遠望できる。嵩山には啓母石のような禹の伝説が伝わっている。禹の伝説は越王につながる。司馬遷は会稽で禹穴を探ったという。禹穴とはどこの穴のことなのだろうか？ 禹の伝説は林屋洞と「靈宝五符」につながっている。「禹穴」と林屋洞の「雨洞」は発音が似ている。禹の妻である塗氏にちなんだ塗山は会稽にある。『芸文類聚』巻8に引く劉宋の孔靈符『会稽記』に、「永興県の東北九十里に余山有り、伝に是れ塗山なりと曰う。『越（絶）書』を按ずるに、禹は塗山に娶る。塗山は山陰を去ること五十里なりと。其の里数を検するに、其の処に似たるなり」とある。

また『太平寰宇記』巻96に引く孔靈符の『会稽記』によると、「会稽の龜山の下に東武里有り、即ち琅琊の東武里なり。山は一夕に此に移り、東武の人も因りて此に徙り、故里は動かず」とある。東武里の移動は、永嘉の乱で村ごと移民したことを神仙信仰的に解釈したものであろう。ここには、北からの移民が南に同じ村を築いた共同体のあり方が窺える。そうすると、林屋洞が地下で王屋山洞と通じているというのも、北からの移民者の憧憬がこめられているのかもしれないなどと想像をめぐらされる。

まだわからないことだらけだが、現地と文献を接続し、よりリアリティのある記述ができるように努めたい。

最後に、制作については古賀弘幸氏の協力を得た。記して謝意を表します。

(M.T.)